

---

# 僕の彼女は男。

ゆずり

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の彼女は男。

### 【Zコード】

Z8328C

### 【作者名】

ゆずり

### 【あらすじ】

男と女の恋愛の固定概念など気にはしない様々な青年、少年達。彼等と世間の常識が違う事は「彼女＝男」ということ。それは周りからどんな目で見られるかはわかりもしません。しかし、難しい考え方など彼等の中にはありません、ただ好きになつた彼を愛す事で精一杯なのですから。時には傷つき、時には涙を流し、時には愛しの人からの拳を受け、時には思いもよらぬ一目惚れをしたりと、様々な恋をする彼等。この先の道を全速力で駆け抜ける多くの多難を抱えた彼等の後姿、どうぞ見守つてやってくださいね。

## プロローグ

大まかに世界を分ければ「男」と「女」の二つで成り立っているわけ。

「男」と「女」が恋をし、夫婦になり、命を育みその先を繋ぎ合せまた繰り返す。

その真実を誰かが正そうとも思いやしない。

それが事の成り立ちで普通ということなのだけれども

どうせ自分はそれが疎いようだ。

大体、「男」は「女」と付き合ひなさいと誰が決めた？

そう、気がついたか？誰も決めてや、いやしない。

誰かが理屈を並べてその理由を話したところで頭にしつかり、とはこない。

確かに事の「成り立ち」としては「男」「女」であるけれどもそれを押し付けられる理由はない。

しつこいがもう一度いう、自分は「男」と「女」が付き合ひと書つて固定概念を否定する訳ではないが正直疎い。

事実、自分の彼女は「男」だ。

世間ではこれを「ホモ」やら何やらこういってます。

そういう事にも疎い自分としては何を言われようが気にしましないが  
ただ「ホモ」といつよりも「ゲイ」と言つてくれる方が心地がいい。

その理由を問われれば一つ答えがある。

「ゲイ」は自分達を否定する為にある言葉ではないと理由。  
そもそも一つは自分の彼女は何時も自分達を表す時笑顔で言つからだ。

「私達はゲイ。 それが何だつていつのよ、 素敵じゃない？」

なんてね。

## 一人目・素敵な初恋。

もしも恋をした相手が男だったら、他の奴だったらどうしてたのか。そんなの解りやしない。考えなんて人のいる限りその分あるのだから。

その多くの考えの中での俺の答えが「そのまま恋をする」という結果という話。

好きなんだから仕方ないだろ？が。文句は受け付けない。

正直な話、小さな頃から恋愛に関しては疎い方だった。

幼稚園の頃、離祭りのイベントやらで好きな子を連れて来て一緒に写真を撮るという物で

一人の女の子が自分の前に来て「一緒に来て？」といふ声にっこり答えた記憶がある。

「じめんね、僕今ななちゃんと遊ぶ約束してるから。他の子を誘つてよ。」

その後、自分を誘いに来た女の子は泣きながら自分の前からいなくなつた。

その後母に「ひびく」と怒られた覚えもある、幼い自分には意味が解らなかつたが今なら解る。

幼い頃の自分に言つてやりたい、そこはもっとと氣を使つて断るべきだと。

小学生高学年の頃、一人のクラスメイトに告白されたときもそうだ

つた。

やさしい可愛い女の子だった記憶がある。

顔を赤くしながら自分の様子を伺い告白する日の前のクラスメイト。そんな子へも答えた言葉は確かにこんな風だった。

「じめん、今から田中達と遊ぶんだけどさ…話は終わり?」

その後クラス中の女子たちから最低という非難を浴び続けたのは言うまでもない。

卒業するまで「最低野中」として女子の間で呼ばれていたのを知っている。

中学生になりその様な可愛らしい告白も何もない男子校へと進み恋愛という物とは程遠い存在になった。

元より普通の自分には、普通にいざれ恋愛し普通に生活していく物だろうと

半場人生のあきらめもついて、老後計画を立てようとしていた話な訳で。

そんな詰まらない日々に突然彼女はきたわけだ。

「むせくるしい男子校に美人な男子生徒が来る。」

そんな噂がたつたのは高校に上がつてから季節がめぐり高校生活初秋の事。

文化祭用意も始まり、情報がより多く行きかう時期に訪れた大きな

事件になつた。

元々体育会系が多い学校だつたせいが、どこの男子校よりも男臭くどこの男子校よりも寂れていたのは事実。

美形なら男子でも何でもいい、そんな考えが大抵の男子についていた気がする。

大体、見目麗しい男子生徒はすぐに先輩に引き抜かれお気に入りされてたせいが

同学年であろうと手出しへどきやしなかつた。

何に期待する必要がある。

今回もどうせ先輩たちに引き抜かれ、ちやほやされるのを見ているだけだらうが。

元々そんな考えをもつていた俺は何も言わずそのままの転入生を待つだけ。

他の男子生徒の異様な盛り上がりなど気には留めていなかつた。

だが厄介なことになるのは得意らしい。

よりによつてその転入生は俺のクラスへ御出でになるらしい。  
どこぞの展性的な小説だよ、そんな文句を隣の席に座る親友の田島に話している中

担任が入つてくる、そのときはホームルームが始まつていたのにも気がついてなかつたし

田島との話に熱中していた。それがいけなかつたんだ、話を戻せば。

田島との話の熱中している中で不意に聞こえてくる涼しげな声。  
凛とした少し高めのトーンでの独特なしゃべり方、不可思議な名前。

むせぐるじい空間に似合わないその雰囲気に振り向いてしまった。

「本城牡丹つていいます。私、男子校というところが初めてなので優しく教えてくれると助かるの。どうかよろしくね?」

長く伸ばされた癖のある金の髪

異様に整つた顔立ち

白い肌に女口調

完璧な笑顔

髪色と顔だちに似合わない学ラン姿

クラス中が睡然と新たなクラスの仲間となる相手の、口調に驚く中で俺は人生初めての一世一代ともいえる恋に落ちた。

「どうか…あれがいけなかつたか  
どうも…田惚れは質が悪いらしい。まったく。」

## 一人目・素敵な初恋。（後書き）

初恋つて自然と終わつてませんか？  
私の初恋は犬でした。

## 一人目・きつかけなんて簡単。

牡丹が転校してきてから学校内は大きな騒ぎとなつた。

美人な転校生はオカマなどという噂が広がつたのは言うまでもない。あんなに期待していたのにと言つ文句が聞こえる反面

予想以上の美人が来たという噂が流れたのも確かな事。

学校内の男子たちはただ勝手に話を進めていたが、当の牡丹自身は何食わぬ顔で

俺の前の席に座つていた。

その姿は非現実的で浮いていて、黒い学ランの真新しさに静かに笑みを浮かべつつ受け答えする様子が不思議だつた。

「なあ、前の学校ではなんて呼ばれたの？」

「本城が、牡丹のどちらかよ。」

「前の学校ではもててただろう。」

「そんな事ないわ、私を好いてくれる人なんて居る訳ないもの。」

「なら俺彼氏候補になるつ」

目の前で繰り広げられていくクラスメイトとの親しげな会話。難もなく癖もなく受け答えをしていく。

それは新しい所でやつていくいき方に慣れていくようで不思議と俺の中でひつかかるものがあつたのは確かなことで。

俺へと挨拶をしてきた時しか牡丹と話していない自分には笑える考え。

恋とは「」の中で妄想を発展させる物なのか未恐ろしい。

俺自身としては転校生が目の前にいて、  
その転校生はただきれいで。

恋にも似た感情を抱いてしまって。

それだけの話かと思っていた。

それだけなら俺としては楽だつたんだ。

苦もへつたくれもくそもなく過ごせたんだから。

それで十分だと呟つのに既に牡丹が転校してきた日から俺は変わつたらしい。

そう人生の機転といつものは若い年では現われやしないだろ。どことなくそんな楽な考えいつていた。

大きな機転はきっと年取つてからと思っていたといつのこと。

突然そういうものはくるらしい。

全ては俺の隣に座る親友の田島の手紙がきっかけだった。

忘れやしない本当のすべての始まりの日の事を。

秋晴れの青い空が窓から見える、牡丹の金の髪が視界にかすかに写る中

田島から回つてきた手紙に書かれていた言葉。

恋に似た感情を抱いていた俺には十分な言葉だつたんだとおもつ。

「知つてた？牡丹つて前の学校で苛められて此処に来たんだよ。」

同情といわれれば別にそれでもいい。

それでも視界にうつる金の髪を捉えてはただ思った。  
真新しい学生服に身を包み、自分を包み隠さずきた相手の覚悟はどうのくらいの物だったのだろうか。

計り知れない孤独と苦痛を抱えてきた

牡丹の小さな背中を見つめながらあの口俺は思った。

「その先が知りたい」

ここで俺と牡丹の出会い話は終わり。  
俺を変えたことの話も終わり。

物足りないと感じたら謝り。つ。  
だけどな俺達にはちんたらしてる時間はないんだ。

何故つて？

それは俺のいとしい彼女が早く今の俺たちのことを  
知つてほしいとせがむからだ。

俺と牡丹が付き合つきつかけの話は  
この先の中でいざれ語るだらう。

それまで俺と牡丹を見守つててくださいよ。

ほら、よく言うだろ。  
青春は短いんだつて。

## 一人目・きつかけなんて簡単。（後書き）

きつかけなんて簡単なようです。  
好きになるのも嫌うのもそれは不意なことばかり。

次回から一人のどたばたした  
日常へと舞台はかわります。  
ぼやきも増えるのでしょうかー…

### 三人目・突然の訪問者

嵐は何時だつて突然くるらしい。

誰だ、嵐の前の静けさという言葉を作つた奴は。  
どこに静けさというものがあつた、答えてみる。

嵐の前が静けさがあるならそれにただ縋り付きたかった。  
くそ、こんな嵐望んでいない。

「嘘でしょ！…何よこれえつ！」

ほら、はじまつたつ。

「ちょっと…啓介これどいづ」とよつ…」

「いや…どつも、こつも、こつ言つ事ですけど。」

「ありえないじゃないつ！突然、私の家に猫がいるなんてつ！」

事の始まりは簡単なこと。

牡丹の家にいるはずもない猫が転がりこんでいたという話。  
そんな中たまたま俺が遊びに来て、猫と遭遇してしまつた牡丹につ  
かまつたという事。

いや、いくらなんでも俺でも突然言われても。

そんな困惑を知つてか知らずか牡丹は俺に抱きつき泣き喚いでいる。

耳に入るのは「嫌」だの「怖い」だの。  
たまには俺の話も聞いてくれ牡丹。

元々、牡丹は猫が苦手らしい。

帰宅途中に猫にあつと決まって嫌な顔をしていく。

嫌な顔をしては俺の後ろへと隠れて猫から身を隠していく。

その理由を聞けば幼い頃、まだ無垢で純粋な牡丹は猫を飼っていたらしい。

それはそれはかわいい子猫で、家の家族全員で可愛がり育てて。名前は自分の名前からとり「ぼん」と呼んでいたらしい。

此処で名前の事をつっこんだら負けだからな。

ぼんを育て可愛がつていたある日。

牡丹がぼんをお風呂へといれ一緒に楽しいバスタイムをしていた時悪夢が訪れたといつていい。

ぼんがお風呂を嫌がり逃げだすのを牡丹が取り押さえ抱きかかえようとした瞬間、ぼんが牡丹の大切な息子をかんだらしい。

そりや…嫌いになるよな。

「牡丹、本当にこの猫が入つてくる理由とか、原因とか入つてこれる原因ないの？」

「ないにきまつてゐるじゃないのよつー。」

牡丹が必死に俺の腕にしがみつき泣き喚いているのは言つまでもない。

困つたことに猫は牡丹の部屋が氣に入ったのか、どっしどと腰を下ろし

部屋の主がベットの上で縮みこみ喫いているのもお構いなしで部屋を見渡し物色していくようにしていく。

根性の座っている猫だなど言っている場合ではない。

可愛げのある猫なら牡丹も猫へとこんなに拒絶はしなかつたんだろう

う

困ったことに元の猫の顔はビリ見ても、いかつい。

まるで一昔前の猫の親分のような顔をしてこちらをこちらでこちら。  
我が物顔だ、此処は俺のものとでも言つよつ。

「牡丹、どうやらあの親分様は此処が気に入つたらしく。  
「ちよつとやめてよ！此処はわたしの部屋だつてばつ！」

泣き叫ぶ牡丹を横目に猫はしおりへと歩いてくる。

完全に背中へと隠れ怯える牡丹をそのままに猫を抱き上げようか。  
意外な重量感、重いと感じながらもやはり可愛い。  
どんなにいかつい顔をしてこよのうの猫は猫だ。

「よし、俺こいつ飼う。」

「…嘘でしょ、私啓介の家に遊びに行けなくなるつ」

「いや、これる。自力でこい、俺を愛してるとこなつ。」

「愛しても無理よつ！絶対に無理つて言つてるじゃない！」

「おーしいかちい猫、おこでな俺の家に。名前は牡丹にしよーな

「…やああああああつ！…！」

可愛い俺の彼女が泣き叫ぶ中  
可愛い俺の家族が一人増えた。

彼女の名前は「牡丹」

可愛い家族の名前は「牡丹」

泣き叫ぶ彼女の声に、紛れて聞こえる猫の鳴き声。

明日から俺の部屋にくる時の牡丹が楽しみだ。

### 三人目・突然の訪問者（後書き）

猫に大切なものの…痛そうですね…；  
ちなみに私は無視が大の苦手っ子です。  
友達といふと倒せるのですけど…

## 四人目・怒涛の文化祭。

ご無沙汰しております、寒くなりましたが  
牡丹はいつもの様に乙女パワーを發揮して生きています。  
ええ、それはもう目を瞑りたいぐらいに。  
今日だつてほら、もう問題を起しあしやがるんだつ

「ちよつと一瞥介！」

俺を呼ぶのはもうやめてくれ…。

寒くなり秋の訪れが見えてきた今の時期は丁度  
イベントの真っ盛りの時期に差し掛かる。

文化祭に、ハロウィン、そして高校生上學年は部の引退と  
多くのイベントがあるが、言うなれば俺達にとって大きなイベントは

文化祭と言つべきか。

牡丹と俺は同じクラスと言つ訳で、やる事も一緒に。

今年のクラスの出し物は「女装喫茶」

最近色々とはやっているが、耳にするのは  
大抵男装喫茶や執事喫茶やメイド喫茶が普通だといつのこと。  
このクラスときたら「女装喫茶」だ。

俺を悩ませるのが相当好きなクラスだろつ。

「ねえ啓介、この服ビビツヘ、

いいんじゃないのか？」

「ピンクと黒、ブルー、オレンジどれがいいかしきりへ、

どの色でもこころ。

「ちよつと聞いてるー!？」

「あー…はい?」

牡丹は先程からドレスや、メイド服、スカートを持ちはしゃいでいる。

確かに牡丹を好きだから、牡丹といるのはいいが、いやほらね。世の女性はお気づきだとおもいますけど、実際体の筋肉がかなりしている

男子に着せてみてください、ほらつ妄想。

気持ち悪いだろ?

それを実際俺がやるとなれば憂鬱にもなる。

胃が痛い、学校の放課後が来るのが怖いのはこれのせいだ。牡丹が怒りつつ俺にドレスをあてがい悩んでいく。

俺はどれでもいいよと呴いていれば、牡丹の愛の拳がくるわけで。

「…つ牡丹、お願ひだからこれ以上俺に恥をかかせないでくれ

「いいじゃない!世の腐女子はそれを望んでるのよつ!?

「…誰だよ!その腐女子はつ!」

牡丹へと叫んでいれば牡丹は牡丹で窓の向いを指している。

どこに人がいるんだよ、そういうてやりたくない。

床や机に散乱したドレスをにらみ見つめては悲しくなる。

思わず抜け殻になりそうな自分を必死に食い止めるのに俺は精一杯で。

ああ、空がまぶしい。

「…そんなにいやなの、路介。」

「嫌だ。」

「…なら解つたわっ、まつてなさい！」

そういう残して去つて行つた牡丹。

嫌な予感がするのは俺だけかと感じていた末に持つてこられたものは女性雑誌。

「これでメイクやダイエットを学びなさい。」

そう来たかー…

怒涛の文化祭時期に入りましたね世の乙女。

夢見る少女に甘い香り、そしていとしい彼女。

俺のポケットマネーにより増えていくメイクセット。

ああ、そうかこれがたぐらみか。

かわいい彼女のためならなんでもするが

この文化祭での俺の羞恥心と、マイク代の損失は大きいらしい。

## 四人目・怒涛の文化祭。（後書き）

読んで下さり有難うござります

文化祭で女装喫茶を見かけました。

個人的には一次元キャラを服をきてモジモジしてる子が可愛くて

ニパニパしてましたね笑

ちなみに続きますよつ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8328c/>

---

僕の彼女は男。

2010年12月10日23時54分発行